

## 翻刻 恵心僧都物語 (大谷大学蔵)

### 中世説話・絵巻研究会

『恵心僧都物語』は、室町時代から近世にかけて流布した高僧物語あるいは法談物の一つである。現在、数本の伝本が現存しているが、諸本間において内容的な異同はあまり認められない。しかし、今回調査の結果、大谷大学蔵本には他の諸本とは系統を別にするだろう点が認められ、また他本によって校合がなされているなど、他の諸本にはみられない特徴のあることが判明したので、次に紹介することにする。

#### 〔書誌〕

写本。袋綴。全二冊。縦二三・〇センチ、横一五・七センチ。薄小豆色の表紙には、本文と同筆にて「恵心僧都物語」の題簽が貼られている。題簽は以前貼られていた題簽をはがしてその上に貼られた形跡が認められる。題簽の寸法は、縦一三・五センチ、横三・三センチ。表紙の裏には「大和武尊十二代景行天皇御子也東国ノ夷狄ヲ亡ン玉フ山田大蛇ヲコロシ玉フト云々」という、本文とは全く関係のない一文が記されている。おそらく、表紙の裏貼りに用いた反故に記されていたものと思われる。

内題はなく、本文は二三丁。一丁の表は、恵心が『往生要集』をつくり唐土においても敬礼されたという、異本より補われた序文が記されており、本文は一丁の裏より始まる。一丁二四行。各行二五字前後。漢字混じり平仮名文。全体にわたり、所々本文の脇に漢字混じり片仮名文で、異本による校合が行われている。校合は本文書写と同時になされていると見受けられる。途中に改行なく、十三丁裏八行目で本文は終了。その後には二字下げにて、異本によって「即花嚴経ノ偈ニ清浄慈門刹塵数トイフ文ト面善浄如満月ト云文トヲ伽陀ニ誦シ念佛数百遍唱ヘ玉ヒテ禅定ニ入ルカコトクニシテ滅シ玉ヒヌ」という一文が加えられており、その下に「湖北ノ海津ノ蓮光寺」の印が押されている。次に紙を一枚加え、表に「釋洵澄蔵書」と書かれた紙(本文とは別筆)が付されており、裏には「西濱蓮光寺什物」と記され、元来、蓮光寺の什物であったことがわかる。

大谷大学図書館の話によれば、昭和三年に、現在の滋賀県高島郡マキノ町牧野・蓮光寺(浄土真宗)より寄贈されたものであるという。「釋洵澄」については、やはり蓮光寺より大谷大学へ寄贈された『法事讃』(写本・三卷)の奥書に、「宝曆七丁丑年」の書写とし

て「湖北釋淵澄」とあり、調査の結果、『惠心僧都物語』にほどこ  
 されている校合の漢字混じり片仮名文と同筆であると認められるた  
 め、大谷大学蔵『惠心僧都物語』は、おそらくは宝曆年間（一七五一  
 —一七六三）前後に釋淵澄によって書写されたものと判断される。  
 『国書総目録』では室町初期の写本とするが修正すべきである。書  
 体は流麗で読み易く、保存も良好である。

### 〔凡例〕

翻刻に当っては、原文を正確に伝えることを期したが、なお次の  
 様な点において手を加えた。

- 一、便宜上句読点及び会話の「」を付した。
- 一、変体仮名はすべて通行の平仮名字体とした。漢字については原  
 則として当用漢字を標準とする現行字体とした。
- 一、各紙丁の始めを一字空白とし、△・○・ウ等で示  
 した。
- 一、本文中にみられる校合は、そのままの形で本文の右脇に統一  
 て付した。
- 一、本文の誤りと思われる箇所には（マ、）と傍書した。

△<sup>一・オ</sup>抑惠心僧都トマフスハ、日本第一ノ学匠又ハ道心者ナリ。一切経七  
 千卷ヲ披キ見玉フ事五度也。諸経ノ中ヨリ、罪悪生死ノ衆生往生ス  
 ヘキ要文ヲ撰取往生要集三卷ノ鈔ヲツクリ、アマ子ク我朝ニヒロメ  
 唐土ニ渡シ玉フ。カンチウノ天子一人三公ヨリハシメテ貴僧高僧道  
 俗男女皈依カンタンシテ、靈木ヲ撰テ五十二間御堂立カノ要集ヲ本

尊トシテ、月ノ六齊ニハ貴賤道俗集リ此文ヲ聴聞スル時、ヲノノ  
 マツ日本ニ向テ「南無源信如来」トトナヘテ三度フシオカムト云  
 云。未レ有凡夫僧躰ニ異國ノ諸人ニ万徳円満ノ仏号ヲ称セラレ玉フ  
 ハ我朝此ノ惠心ノ僧都ハカリナリ。父母ノ遺言ヲタカヘス孝養フカ  
 ク存シ、母ノ慈念深クシテ仏道ノ本意ヲトケタル先蹤コノ夏ニキワ  
 マレリ。己上異本ノ文

△<sup>一・ウ</sup>抑惠心僧都と申は 異本ニ俗姓ハ安部氏ナリ 大和国葛下郡 当麻郷ノ人

ナリイニ の人、父は卜氏正親 安部正親イニ 母は清氏 清原氏ナリイニ

也。夫婦、一人の男子なき事をなげき、同郡の内に高尾寺とて観音靈  
 驗あらたなるまします。三ヶ年の間参詣を企て祈誓し給ふに。夢の告

新なり。御帳の内より高僧一人立出て、一顆の光明ある玉をあたへ給  
 ふと見て懐妊せり。其後九月満して、あたりも輝はかりなる男子を誕

生あり。日に随て花の躰月の白はせ世に類なく座ければ、父母の悦限  
 なし。少兒既に七歳に成り給ひける春の暮に、父病の床に臥今をかき

りと見えしかは、彼兒を呼はせて枕の辺にすへつゝ最後の別を惜遺  
 言し給ひける有様こそ哀なれ。「汝幼少といへとも我か今の詞を忘

なよ。これ最後の遺言長き世の思ひ出なるへし。我身一人の男子  
 なくして、汝を高尾寺の観音に三ヶ年の間詣て乞申たりし子なり。

せめては十歳にならん迄存生へて見まほしく思へとも、心に任せぬ  
 生死界の習ひなれば、翠子の咲出る花の装を見捨て、只今北芒の露

と消なん事の悲さよ。相かまへて、汝高尾寺の観音に詣て我後  
 世を訪へ。又いかならん僧房にも近付学文して僧に成、必父母の苦

世を訪へ。又いかならん僧房にも近付学文して僧に成、必父母の苦

提を訪ふへし。」とて、みとりの髪かきなてつゝ息絶魂去たまひき。  
 爰に児と母と共に別を悲む事かきりなし。泣々一片の煙となして  
 後、児、父の遺言を違へず毎日彼寺に詣て、道すから父三ヶ年の間此  
 道を参下向じ給ひつらん哀さよ。御堂を見廻せば、彼間此間も父の  
 礼拝し通夜し給ひける所ならんと昵ましく覚えて、同じ本尊と申な  
 から父の憑を深して乞申させ給ふ我身なれば、殊になつかしく又  
 かたしけなくて、「其に付ても観世音我を出家せさせ、父の菩提を  
 訪ふ身となし給へ。」とて、いとけなき心に懇に恭敬し礼拝し給へ  
 は、見る人涙を流し哀を催さすと云事なし。或時、児の夢に大に明  
 蔵ニ立入タレハイ  
 なる鏡とすこし陰たる鏡と二つあり。高僧来て曰、「此大なる鏡は  
 汝かためにはあたへす。少陰たりけるを与る也。是を持比叡山に登  
 て、横川にして是をみかくへし。」と云云。此由を御母に語給へ  
 は、母悦て夢を合て云ふ様「鏡は先仏法の智慧なり。叡山に住し  
 て智慧の鏡をとき磨て、父を引導し天下の燈となるへき相なり。」  
 と悦給ふ。然れども、やもめにしして世間貧しくまませは、山寺へ  
 登すへき便なし。歎なから月日を送られける処に、比叡山大廻の行  
 者と云聖、里近く通られけるか、児の花の躰月の貞はせわりなかり  
 し有様を見たまへて、母のもとへ尋行て此児を乞申されける。「我  
 身賤といへとも比叡山の住侶大廻の行者と申て、諸寺諸山を行めく  
 る聖なり。此児を見るに、眼の中に智慧の泉をたゝへて拔群の相ま  
 します。我山の名匠、慈恵大僧正の御弟子となし給へ。口入申へ  
 し。」と有ければ、母儀斜ならず悦て左右なく領状せられけり。聖  
 山に登て僧正に此由を申入れければ、僧正曰「仏法の恵命を継は

利根にして、器量の児にしくはなし。設ひ其身賤と云とも、仏法の  
 器量と成へくは急迎へ寄へし。」と有ければ、聖面目有て力者共を  
 とまなひ、大和国へそ下られける。「御むかひに参りたり。」と申  
 されければ、母かならず今日明日の事とは思はさりつるに、悦の中  
 にもまた心もとなく胸打塞りて、詞すくなく思わきたる気色もなく  
 聖に申されけるは、「一日は思あへず御約束申て侍れども、必今日  
 明日とは思ひ侍らす。なき人に過別ては、尽せぬ思ひ夜昼此子と  
 共にこそかたり合て、自か歎をもやすむる便とは成つれ。いまた一  
 夜も恩愛の懐慈念の衣の下を離さる稚者に、只今別なは今夜いか  
 か明すへき。御迎は喜敷侍れ共、死して別るゝその上に又生て別を  
 重ん事のかなしさよ。」と甲斐なき女の心に思ひ切得ず侍るなり。  
 され共よるこはしき便なれば、「今は相具して登り給へ。」と泣く  
 くととき申されり。母みつから装束せさせて、既に力者の肩に乗て門  
 外へ出給ひければ、暫申へき事有とて呼返して、帳台のうちなる下箱  
 の中より、錦の袋を取り出し少児に与へてのたまはく「是汝か父の朝  
 夕読給ひし阿弥陀経なり。汝か為には父のなかき世の忘れ形見な  
 るへし。山に登なは別の御経をは差置て、最初に此御経を習読て父  
 の菩提を訪へよ。相かまへて父の遺言を忘すして、あのみ武峯の上  
 人のことく知恵も道心も有て貴き僧と成へし。自只今の詞最後の遺  
 言と思へし。人の親の子を思ふ道の限なき事諭ん方もなければとも、  
 忍て恩愛の家を出す心地いか斗そや。一時片時も間をおしみて学文  
 能し給ふへし。親を見たければとて、学文の違を空して里へ下給

なよ。みつからか許なくて親有かほに若下り給ふものならば、親子更対面申マシイの眠ひ有へからず。貴僧に成て一天の君にもしられ奉りなは是より許申さん。其時見参候へし。此詞忘給ふまし。」とて御経を渡し給へは、児泣く是を請取てのたまはく「悲かな。父には死して別をなし、母には又生て別るるたにかなしきに、今は再会の期なく勘当ヤランへ一目も見え人共ニトモナハシ立出テ今別テ何ノ時逢奉ンシを蒙て別奉るこそ悲しけれ。」とて声をおします泣給へは、教輩の力者共、皆ふ覚の涙を流しけり。さて、比叡山に登給ひて慈惠大僧正に迎ノ人イホトイ対面し給へり。僧正児を御覧して「誠に此児は眼の内に知惠深して利根聰敏の相有。」と悦給ふ。漸学文せさせ給ふに、一字を教に千字を悟ノ相アリイれり。住山の年月幾ならざるに経論の底を極給ふ。三年も過ぬれば比ノ学匠ニナリイ世に類なくおはしまし、大聖文珠の化現かと疑れ、既に十歳に余り給へは、三塔に双なく三千の学侶に勝一山の碩徳に侔れり。末代仏法の恵命、此人に止りたりと云り。十三才にして出家し、恵心の御房と申されき。尺迦一代の教法の鏡を磨て、五時八教。頭密の底をメテ残ナシイヲ諸山ニモ京九重ニモ聞エシカハイノ人有とし究む。此由山上にかくれなく、九重までもかゝる希代ニイられけり。然は村上天皇の御時、天曆十年六月廿一日より清凉殿におゐて、五日に十座の御八講有けるに、此新発意の事一天の君聞召て、慈惠僧正に勅あり。「件の小僧相具して今度の御八講を勤させらるへし。」と有ければ、僧正面目を施して相具して参勤し給ふ。未十五に成給ひければ、容顔嚴羅羅尊者の古しへも、是には争か増るへきと覚へたり。綾羅錦繡を法服とし、金銀をちりはめたる香炉に水晶の念珠を取具して高座に登給へる御姿、目も心も及はれず。昔靈鷲山の重閣講堂にして一代の聖教結集の時、一千人の大阿

羅漢の中に阿難尊者の導師として、大覚師子の高座に登り、如是我聞と説き給ひける有様も是には争か増るへき。迦陵頻の妙なる御声雲洞ノ雲ニ響聞ニ涙モト、マラスイに響けり。既に経文の段に及ひしかは、勝義勝義の幽旨を述講師ナシ至極イ甚深の奥旨を誦す。詞の林花鮮にして法水の浪閑なり。舍利仏の智恵富樓那の弁舌も是には過しとそ覚えたり。帝叡感にたへ、七重の御衣を御簾の中より御布施におくらせ給へは、一人三公より月卿雲客等に至る迄、涙をなかし随喜の袂をしほりけり。いまた高座より下給はざるに、香炉筥を僧都の本座に置れつゝ、恵心僧都と申き。慈惠僧正を始として、三千の衆徒も吾山の面目未代の法燈と悦れけり。一天の君も朝家の御守り国の宝と叡感有。御八講終りてのち、白河の御宿坊にかへらせ給て思召様は、「我始て登山の時、一天の君にもしられ奉ん時対面すへしと御約束有しかは、その本意足ぬ。出家の躰見へ奉らん。」と思て、御文を書いて七重の御衣に具して既ニ大和の母御前へそ送り給へり。其文に云「適受かたき閻浮の人身を受、学かたき成仏の道を習へり。併父母の重恩是なり。七歳の時恩愛の家を出て台嶺に登し時、学匠に成て一天の君にしられ奉らん程の身と成らん時対面有へきよし契らせ給へり。其御詞心肝に染て忘かたく侍りしかは、万草露ふかく嵐はけしき白雲の洞に身を交へ、止観の窓に眼をさらし、玄文の机に臂をくたき、何の日か習学の本意を達して見へ奉らんと螢雪の勤懈らす。いまた十五歳にして円宗の学位に登、三千の面目に備はり、一天の君より奉録を給れり。其恩賜の御衣是なり。早く御許れを蒙て、徳海の深き御躰を見奉ら

ん。」と出給へり。御使此御文と御衣トイを給はり、母御前に奉る。御文を披き御覽して、さめくくと泣給へり。御使をはしめ見る人思ふ様「実に理りなり。未幼少にして一天に名を拳面目を東西に施給へる悦はしさの遣方なくして泣給ふよ。」とおもひあへり。然るに良久しくして、使者に告て云「汝僧都の御坊へ委く語り奉れ。自か本意を背給ふ。恨しければ態と御返事は申さぬぞ。詞にて申へし。かゝる憂世の一旦の世路をはこくまれんと思はく、男になし父の跡をこそつかせて心安くそひ奉るへき身なれ共、片時も離かたき恩愛の懐を出し多年に及へり。朝暮に恋しく思ふこと御心より切なり。されとも永き闇路を助訪ひ給ふへきのみこそ本意なれ。一分の悟りもなき愚なる女の身に空しく信施を受ん事なし。御志の御衣は速に返し奉る。対面の事は是より申へき時ありと語れ。」とて一首の哥をそ送られける。

後の世の法の橋とも頼しに世わたる僧と成そかなしき  
ハ七・オ

とそなされて使に給はりて、さめくくと打泣給へり。扱僧都は、御母のいかに悦給ふらんと思食所へ御使帰りて、件の子細を委語り申ければ、僧都声打上てのたまはく「有難しく。我母は普通の女人にてはまします。権者にておはしけり。親と成て子を思ふ道、鳥類等に至まで類ひなき物そかし。七歳の特別奉て今迄九年の間互対面なければ、進てこそ見給ふへきに、かくまできひしくのたまひて、返事にも預からず、御衣までも返し給へる御心底貴く覚ゆる。」とて袂もしほる斗に見え給ふ。其後僧都思ひ切給ひて、比叡山に帰り登り「今は一筋に父母の菩提を祈らん」と思召て、十二年の籠山

を始行はんとて、慈惠僧正にいとまを申させ給ければ、「未若くまします。能く御学文あれ。」とて左右なく許給はず。僧都強に申給ふ

やう「抑本師尺尊は御母摩耶の為に、七歳にて始て道心を発十九にして城を逐、檀徳山に籠、難行苦行十二年の間御身をやつし、終

に成等正覚し給ひて切利の安居九十日を勤て、母の御為に御法を説給ふ。加之黄金の御膚にて、淨飯大王の金棺を荷ひ給ひしも、皆是

父母の孝養を専にし給へる故に、自も十二年の間叡山を出す行ひ勤、二親の菩提を祈るへし。」と強て申されければ、僧正理に伏して

暇を奉らせ給。僧都悦給て、昔釈尊檀徳山にしての御修行を思ひやり、玄冬素雪の寒き朝にも群山の雪を分て峯に上り花を摘、九夏三

伏の熱き夕にも白雲に交り谷に下りて閑伽の水を結ひ給へり。止観鑽仰の窓の前には、一念三千の月澄り。誦経座禪の床の上には、一

乗実相の霜さへて、夜を以日に繼、久修練行の勤怠ることまします常。常に聞ゆる物としては、峯の嵐梢を吟する声斗なり。

只憑所は、十羅刹女擁護の誓ひ。期する所は、即往安楽の願望なり。六根懺悔の功つもり、恵日の光にてらされて、罪障の霜消しか

は、十二年の春秋程なく過にけり。僧都難行の際に、一代聖教を勤文として、母の恩深き要文を撰て、悲母勸進と云一卷の抄を作り、御文を書添て母御前へ送り給へり。其文に云、「夫一代説教の肝要

は、父母の恩に極れり。恩山。高して、詞窮て述へ難く、徳海。深くして、一劫を尽しても酬ひ難し。故に尺尊難行苦行の昔を思ひや

憑掛者トテハイ、望ラ期スルコトテハイ、至極イ  
 只憑所は、十羅刹女擁護の誓ひ。期する所は、即往安楽の願望なり。六根懺悔の功つもり、恵日の光にてらされて、罪障の霜消しかは、十二年の春秋程なく過にけり。僧都難行の際に、一代聖教を勤文として、母の恩深き要文を撰て、悲母勸進と云一卷の抄を作り、御文を書添て母御前へ送り給へり。其文に云、「夫一代説教の肝要は、父母の恩に極れり。恩山。高して、詞窮て述へ難く、徳海。深くして、一劫を尽しても酬ひ難し。故に尺尊難行苦行の昔を思ひや

り、十二年の行を勤て父母の菩提を祈。加之二代聖教七千余卷の肝要を集て、母の徳ふかき旨を明して九品の往生を勧奉る者也。十二年の苦行を随喜し給ふものならば、御許を蒙りて片時の間恩願を拜し奉らん。」と書給へり。此度は母御前懇なる御返事有。「誠に十二年を限て難行苦行し、父母の菩提を訪給ふとの御文、争て随喜せざるべき。父の遺言を思ひ知給ける事有かたく覚え侍る。就中、悲母勧進と云一卷の文を給ける事往生極楽の亀鏡と深く憑み、常に此聖教を披き見て、御恋しさをなくさむへし。御年今は三十に及び給へり。七歳にて竹馬に鞭を打給ひし面影はかり常に思ひ出し奉侍。台鎮程近き処なれば是より申侍らん時御下り候へ。思ふ子細侍る。」とて更に御許容なかりけり。御返事を披御覽して、僧都は母御前を恨て声を上て泣給ふ。「さしも身を苦しめ心をくたき、十二年の月日を待暮せしも母を見奉らんか為と思ひつるに、心つよくも御許なき事の悲しさよ。」と歎きながら年月を送り給ふ程に、既に三十にも余り四十にも満給へとも尚御許なかりしかは、僧都思ひのあまりに根本中堂に参り給ふて、薬師如来に祈誓し、山王大師に祈り給ひけるは、「我叡山に機縁厚して山王大師の眷属と成医王善逝を本尊と憑奉る。仰願は薬師瑠璃光如来十二神将満山護法憐を垂て、恋しき母を見せしめ給へ。」と毎日参詣し給ひける。有時、中堂より下向まし／＼けるか、あまり故郷の恋しさに、大嶽に上り大和の方を見遣りて、「あの雲の下にこそ我か母の御座す里はあらめ。こひしくも又うらめしく、仰此世は老少不定の境生者必滅の習そかし。我か母は心強くましますとも、我か身若先達なはいかに歎給ふ

共後悔その甲斐なかるへし。母既に老衰へ給ふて余命いくはくならず。西山に傾く月草葉の露の風を待つよりも、猶危き浮世そかし。押て参は不孝の咎遁れ難し。せめて隠れ忍ひて余そなからに御声をなりとも聞御容をも見奉らん。」と思召て、ひし／＼と思立給へり。殊に御身親しき御弟子二人相具して、修行のさまに出立て、古郷の空に趣給ふ。さしも秋の末なれば、よろつ物うき心地して、西坂本を下過て、都のうちをさし、急木幡山にかゝりつゝ、まつ宇治の平等院へ参詣有。山路の雁、野への鹿、秋を慕し声冷し。四方の梢のみち葉をさそふ嵐もはけしくて、千種にすたく虫の音の霜枯わたるも哀也。奈良の都も過ぬれば、葛下の郡御里近く成けるに、常に母御前より御使に参ける下男御文を捧て足早に歩けるか、僧都を見付奉て、「こは何なる御機縁そや。態と山へ参るなり。御文披き御覽せよ。母御前は此程御風の心地とて悩み給ひつるか、すてに七十に余らせ給へは、老の御病極て、万死一生に見へ給へり。今朝の暁より御口籠らせ給ひ、物をも仰られさりつれば、此御文は御姉安養のあま御前より遊しつるなり。これ迄下給へる御更御機縁の程有かたく侍へとも、今はさためて此世になき人と成給ひぬらん。若や今一足も早く進ませ給へ。」と申もあへす涙にそむせひける。僧都は文を手を取給ひて、披き見給ふにも不及自に押あて、道の辺りに倒れふし絶入給ふ有様は、目もくれ心もあられさりけり。二人の御弟子も涙を押へつゝ、前後に並ひ居て勸申されけるは、「かくて道の辺に時を移し給ふべきにあらず。御歎は尤理りにて候へ共、若生きてわたらせ玉ふ御躰をも一目成共見給ふへし。」とて、左右の袂を引立て古郷へとそ急ける。さしも寡にて多の年月を住あらしたる旧宅なれ

は、築地あれとも覆もなし。門は扉も破はて、庭には草ふかく軒にはしのふのしけりあひ、籬の鳶の風にをきふすも、実にまつしき程そしられたり。内にさし入て見給へは、荒たる軒の板間より雨風たまるへしとも覺えず。左右なく母御前の病の床に至て見給ふに、看病の尼女房あと枕に五六人侍り。各僧都を見付て声を一にして泣あへり。「遙に日を隔て、行道を告る日のうちに来り給へる事の有難き機縁なれとも、御母は今朝辰の刻の終りになき人の数に入給へり。若今一日とく来り給は、此世にての御対面も有へきに、さこそ本意なくおほすらん。」と声くなくとき泣ければ、問につらさはまさりつゝ、中く此有様を見さりせはとて絶入給へり。良久しうして心をとりなほし、泣く衣を引のけ、母の御形を見給へは、七才にてわかれ給ひしに、其御面影はかはりはて、其御躰とも覺へず。八旬に老衰へて病苦に身をおかされ給ひてなき人と成せ給へは、僧都の御心の中おもひやられてあはれなり。看病の尼女房達かきとき申けるは「年来御対面なかりつるは別の子細も候はず。常に御物語有つるは、『悦はしくも我かゝるいみしき上人を手に持、我が身老俄に成果て今日明日をも知かたし。僧都も今は四十に余らせ給へは互に見みへ度は思へとも、たまく仏法修行の人の違を我身ゆへに片時もむなしくせん事罪障ふかく覺えて心強打過るなり。殊には最後臨終の時善知識に呼ひ下し奉らん。今しはらく』と押へ給ふ間に、御病次第に重く見へ給ひしかは、母御前にかくし奉りてまいらせし也。日來は『臨終の時の善知識に請し下し対面あるへし』とのたまひしか、今はその本意相違して、むなしき御躰見奉らせたまふこそかなしけれ。はかなかりける兼言かな。此世に御座

せし時、こしかた行末の御事互に語り給ふならば、いかばかり御心安有なん。」と各くとき申ければ、僧都は天に仰ぎ地に伏し給ひて、梵天帝堅牢地神本山護法に祈給ふやう、「我宿願厚くして山王大師の眷属となり、たまく仏法修行の身となれり。一期の間の修学薰修により、三宝仏陀必哀愍して我が願をみて給へ。七才の時別れ奉りたる乳房の母を今四十二歳にして始て見奉るといへとも、此世になき人とならせ給ふ。定業限り有道なれとも仏法不思議の力を以て刹那の間の違をゆるし、生有る躰を今一度見せしめ給へ。」と祈念し給へは、此詞を神明三寶も哀み給ひけるにや。息絶魂ひさりて五時余りに成給へる人、忽活り纔に御目を開き、僧都を見給ひて涙を流し給へり。僧都の心の中申も中く愚なり。水魚を取て大海に放つよりも猶喜はしく、又仙家より歸りて七世の孫に会けんも是には争か増るへき。二人の御弟子を初て、看病の人々此有様を見たてまつりて「扱も末代の不思議。」とおもひ、掌を合せて各僧都を拜まれけり。良久しくして御母正念に住し給ふと覺えて、息の底よりのたまはく、「こは哀なる事共かな。恩愛の契り深ければ、幼かりしその躰もわすれず、親子の昵芳しければ、病のけからはしきをも忘給へり。我身の老衰たる事は扱置ぬ。既に四十に余り給ふ程の老僧と成給ふまで見参申さぬ事、いか斗恨しく思召つらん。対面の期を是より申さんと常に御返事に申せしは、かくのことく最後臨終の善知識の為なり。其本意相違なく、その対面返も嬉しく侍る也。こしかた行末の事共尽せぬ事なれば、心乱れて臨終の障と成ぬへし。宿縁朽せずは、必極楽浄土にて待奉るへし。はやく念仏す

ゝめ給へ。今は念仏の声より外の詞をましゆへからず。仏の相好の外は他事に心をうつさし。よろこはしきかな善知識に値へり。必淨土に十三・オ生るへし。」とて自起なをりて、西に向ひ手をあわせ、十念成就し給へは、僧都も看病の人々も念仏称名四十余遍に及びて、眠るかことく、永寛二年九月十八日の酉の刻に御年七十二にして往生し給ひぬ。実に嚴重なる往生なれば歎きの中の悦也。然共、僧都おほくの年月を恋ひしたひ給ふて、七才より今四十二の御年はじめて対面し給ふに、過にしかたの多くの思を一言も申述へ給はず。空く見ナシし給ひけん心の中こそ哀なれ。今生の親子の値遇、片時の間なるかなしさよ。宿縁の程も恨敷泣く／＼十念成就の御姿。絵に写し給ひて、御守に納め給ふ。日來の御名残も切なるにや、七日に余るまで、生たる人に向へるかことく越方行末の事共のたまへて歎き給ふ。名残は多けれども、扱しも有十三・ウへきならねは、泣く／＼野辺に送り一片の煙となしたてまつり。五旬の仏事もはてしかは、遺骨を御頸ヒロイにかけて本山に攀登らせ、弥道心ふかく成給ひ「今生こそ父母にともなふ縁うすくとも、来世こんよにては一仏淨土にと契給ひし上は、此世に心をとめ給はず。いそぎ淨土に往生し、九品のうてなの上にして、母御前を見奉り弥陀を拜し説法を聞へしとて、往生の行おこたらすして、寛仁元年六月十日御年七十六にして入滅し給へり。

一本ノ即花嚴經ノ偈ニ、清淨慈門刹塵数トイフ文ト面善淨如満月ト次下云

云文トヲ伽陀ニ誦シ、念仏數百遍唱へ玉ヒテ禪定ニ入ルカコトクニシテ滅シ玉ヒヌ。

〔解説〕

『惠心僧都物語』は、大谷大学本において序と跋文がない以外は、内容的には諸本ほとんど同じである。

次にその梗概を大谷本によって記す。

——高尾寺の觀音の申し子として生まれた惠心は、父の遺言に従って高尾寺へ參詣し、出家し父の菩提を訪う身となるよう祈願する。或時、夢の中に高僧が現われ、「大に明なる鏡とすこし陰たる鏡」を示し、そのうちの曇つ鏡を惠心に与え、比叡山の横川で磨くようにと告げる。出家の手立てのないまま日を送っていたが、比叡山の大廻の行者に出会うことよって、比叡山に登り慈惠僧正の弟子となる。別れにあたり、母は惠心に、帝に知られるような僧になるまでは会わぬ旨を、強く言い渡すのであった。比叡山での惠心は勉学に専念し、幼くして比叡山無双の学僧となり、十三才にして出家し、惠心と名のり、その名は宮中にまで知れ渡った。十五才(他本「十三才」)の時、清涼殿で行われた御八講の講師を勤め、その様子は、昔靈鷲山の重閣講堂において、阿難尊者が導師として大覺師子の高座に登り、如是我聞と説かれた有様にも勝り、あたかも迦陵頻の妙なる御声が雲に響くようであった。帝は叡感のあまり惠心に御衣を賜う。惠心は母の本意を遂げたと喜び、御衣を母のもとへ送り対面を願うのであるが、母はさめざめと泣き、父母の後世を訪うために出家させたはずなのに、その本意に違う、として返事の文はおろか、御衣も送り返すのである。母の心中を察した惠心は、父母の菩提を祈るため十二年の籠山行を行ない、難行の隙に一代聖教を勘文として、母の恩の深いことを説く要文を撰出し、『悲母勸進』という一卷の抄を



つくり母のもとへ送る。母もさすがに今回は返事の文を送り、それを見た恵心は、声をあげて泣くのであった。四十才を過ぎてもおお対面を許されない恵心は、母恋しさのあまり毎日根本中堂の薬師如来へ参り、母との対面がかなうよう祈願する。或時、母恋しさがつり、弟子を伴い故郷に向かってしまう。母の使いと出会い、姉の手紙によって母が病の床に居ることを知り、絶え入らなばかりに驚くのである。急ぎ我が家に着くと、家は荒れはて、母はすでに亡き人となっていた。嘆き悲しんだ恵心は、神仏に、「定業限り有道なれとも仏法不思議の力を以て刹那の間の違をゆるし生有る躰を今一度見せしめ給へ」と祈念すると、神仏もこれを哀れんだのであろうか、忽ち母は息を吹き返し、母との対面がかなうのである。恵心は母に念仏を勧め、恵心ははじめ母をとり囲む人々が念仏を唱える中、母は眠るがごとく往生を遂げるのである。このように、『恵心僧都物語』は恵心の母恋物語の趣きが強く、恵心の出家から修行すべてが、最後の母の臨終と蘇生、そして対面という場面へ収斂されていくように構成されている。

恵心僧都源信についての説話は、平安・中世を通じて『法華験記』『今昔物語集』『古事談』『発心集』『撰集抄』『私聚百因縁集』『三国伝記』等多くの説話集に収められている。その中で『恵心僧都物語』(以下『物語』)と構成・内容ともに類似しているのは、『今昔物語集』巻十五第三十九話「源信僧都母尼、往生語」と『三国伝記』巻十二第三話「恵心院源信僧都事」である。

『今昔物語集』の話については、高橋貢氏による詳細な考察があり(「源信僧都の母の話―巻十五第三十九―」『中古説話文学研究序

説』△桜楓社、昭49▽所収)、『三国伝記』と『物語』の関係については、篠原昭二氏が「直接の親子関係ではなくても、それに近い関係を想定しなければならぬ箇所が多々あるし、全体の構成も別のもとはいえぬものがある」とされ、『物語』は源信の母恋と源信の修行を思いやる母の自己犠牲が強調されており、「仏道修行と恩愛の情の相克を主題としている」としておられる(「伝承者の思想と説話の形態―源信の母の往生譚をめぐって―」『論纂説話と説話文学』△笠間書院、昭54▽所収)。

篠原氏が述べられるように、構成・内容面から考えて『三国伝記』から『物語』への展開が考えられるわけであるが、『物語』が『三国伝記』にみられる話をどう展開させ得ているのか考えてみたい。両者を比較して、話の構成上著しい違いをみせるのは、御八講の後、母より訓戒を受けた恵心が、十二年の山籠を行なった後の記述である。

『三国伝記』においては、十二年の山籠の後、伊勢太神宮へ参り七日籠り、「末代ノ衆生出離ノ要道ヲ尋ル事有バ、阿弥陀仏ヲ念ゼヨト勸ベキ由ヲ示」すという神勅に依って、一切経の中より『往生要集』を撰集し、それが唐土にまで渡り、貴賤道俗の帰依を得たことが記されている。

これに対して『物語』では、十二年の「難行の際に一代聖教を勸文として母の恩深き要文を撰て悲母勸進と云一卷の抄を作り御文を書添て」母に送り、対面を願うのである。また、母恋しさに、毎日根本中堂へ参り、薬師如来に母との対面がかなうように祈願するのであり、恵心の修行は、母のため、母との対面のためにあるともい

える。『三国伝記』が『往生要集』をあげたのは、高僧恵心僧都という意識があったからであり（このことは伊勢太神宮の神勅からもうかがわれる）、その結果、『三国伝記』の恵心には、『物語』の恵心のように母恋しと泣くような場面は一つもみられないし、また、薬師如来に母との対面を祈ったりはしない。

恵心が『往生要集』を撰出し、唐の人々にまでも敬礼されたという記述は、『三国伝記』独自の記事ではなく、『物語』にも、大谷大校本を徐く他の諸本に、序文という形で述べられている。しかし、序文から跋文に至るまで一貫して考えるに、『往生要集』を撰出し、唐土にまでその名が鳴り響いていた高僧恵心と、母恋しと泣く恵心とはあまりにも差があり、唐土における恵心への尊敬のことが、本文中に生きていないように思われる。むしろ序文を持たぬ大谷大校本において、恵心の母恋物語としての一貫性があるように思われる。

恵心の母恋を考えるのに、『三国伝記』との比較の上で注目されるのは、母の往生の場面である。

『三国伝記』においては、修行中の恵心が「中堂より下向シ玉ヒケルガ、余リニ古郷ノ母ノ恋シサニ」俄に弟子を連れて故郷に向うのであるが、『物語』ではさらに「母既に衰へ給ふて余命いくはく」もないゆえ、「せめて隠れ忍ひて余そなからに御声なりとも聞御容をも見奉らんと思召てひしひしと思立」つという、母を恋慕う述懐がある。この後、故郷に向かう道行文があるわけであるが、この道行文は母と恵心との対面、そして母の往生の場面へと緊張を高めていく効果を持っている。

『三国伝記』での恵心は、母と生きての対面がかない、病の床で恵心を迎えた母は、最後臨終にあたり「喜シク知識ニ値ヘリ。今ハ浄土ニ可シ生」として、自ら起き上がり「西ニ向テ手ヲ合テ、十念不レ乱唱ヘ玉ヘバ、僧都モ看病ノ人々モ共ニ念仏ス。称名十返余ニ及テ如レ眠」往生を遂げるのである。

ところが、『物語』においては、恵心が到着した時には、母はすでに亡くなった後であった。そこで、恵心は神仏に、「七才の時別れ奉りたる乳房の母を今四十二歳にして始て見奉るといえとも此世になき人とならせ給ふ定業限り有道なれとも仏法不思議の力を以て刹那の間の違をゆるし生有る躰を今一度見せしめ給へ」と祈念するのである。恵心が死者を蘇生させる話としては、『古事談』巻二ノ三二「清義、安養ノ尼ヲ蘇生セシムル事」、「撰集抄」巻九第三「安養尼之事」、「沙石集」巻一ノ五「地蔵看病給事」に、妹の安養尼の臨終に間に合わず、どうすることもできずに、修学院の清義僧都（『撰集抄』『沙石集』は勝算僧正）を頼んで、清義（勝算）が火界の呪を誦し、恵心が地蔵の宝号を唱えて蘇生させる話があり、また『古事談』巻三ノ二九「嚴玄、死人ヲ蘇生セシムル事」に、恵心に仕える法師が頓死し、恵心が地蔵の宝号を唱え、嚴玄出山を召して加持せしめたものの蘇生せず、暮方になってようやく蘇生したという話があり（『沙石集』巻一ノ五「地蔵看病給事」に同話あり）、いずれも他の僧の手を借り、その方法も地蔵菩薩を念じたり、宝号を唱えるというものである。しかるに『物語』において母を蘇生させたのは、加持ではなく、神仏さえも感じさせた、恵心の母を恋慕う愛情に外ならない。

だから、蘇生した母が「纔に御目を開き僧都を見給ひて涙を流し給へり」という描写や、「僧都の心の中申も中々愚なり」といった記述がこの蘇生の中に生きてくるのである。

こうして、『物語』において、来世こそ一仏浄土にと契ったうえは、「此世に心をとめ給はず。いそぎ浄土に往生し九品のうてなの上にして母御前を見奉り弥陀を拝し説法を聞へし」という恵心の思いが、同文を持つ『三国伝記』以上に読み手の胸を打つのである。

#### 〔諸本〕

『恵心僧都物語』の諸本については、絵巻を含めて、松本隆信氏が「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（奈良絵本国際研究会編「御伽草子の世界」三省堂、昭57▽所収）の中で分類されている。ここでは、その分類に従い、現存諸本の中における大谷大学の位置付けをしてみようと思う。（△▽内は本稿に用いる略称）

#### A、恵心僧都絵巻

。国会図書館蔵・応永八年奥書本の模写絵巻 大一冊（『室町時代物語大成』三に翻刻）

。妙法院蔵・同右模写絵巻 一軸（『大日本史料』寛仁元年六月十日条に翻刻）

。藤井隆氏蔵・同右奥書写本 大一軸（『未刊御伽草子と研究（四）』に翻刻と解説）

#### B、恵心僧都物語

(イ)法隆寺蔵・天文十一年写本「恵心僧都之御物語雙紙」 大一

冊 △法隆寺本▽（正木直彦氏写本の影印本、昭11刊）

(ロ)慶応大学蔵・室町末期写本 半一冊 △慶応本▽（『室町時代物語大成』三に翻刻）

。国会図書館蔵・寛永十一年写本 大一冊 △国会本▽

(ハ)岡田真氏旧蔵・室町末期写本 大一冊 △岡田本▽

(ニ)大谷大学蔵・江戸中期写本 大一冊 △大谷本▽

(ホ)高野山金剛三昧院蔵・写本 △高野山本▽（『大日本史料』寛仁元年六月十日条に翻刻）

(ヘ)慶応大学蔵・寛文四年長谷川市郎兵衛刊絵入大本 三巻 △刊本▽（『室町時代物語大成』三に翻刻）

絵巻については、藤井隆氏が『未刊御伽草子と研究（四）』の中で解説されている。氏によれば、三本ともにすべて同じ応永八年（一四〇一）の識語があり、親本を同じくするものと思われること、原本は嘉慶三年（一三八九）以前（おそらくは嘉慶年間）の成立であり、応永八年に加証識語が付されたものであろうと結論されている。

また、内容的な面から、絵巻の二段目（恵心がある所の法要で導師をして得た布施を母のもとへ待って行くと、母は汝を法師にしたのは後世が助かるためであるのに、かかる地獄の業を見せるといつて泣く話）は『発心集』第七―九話「恵心僧都、母の心に随ひて遁世の事」に拠っており（但し、絵巻には『発心集』にみえない「君をこそ法の橋とはたのみしに世わたる人となるそかなしき」という母の歌がある）、二段目（恵心が檀那と相議して、世間の尊敬を集めていた書写上人を無智と侮り、論議をしかけに行くのだが、逆に悟さ

れる話)は、『古事談』卷三ノ二四「源信・覺運、性空ト問答ノ事」と同話であることを指摘されている。

さて、物語についてであるが、今回の調査は分類B(一)を中心に行なった。その結果、大谷本は他の諸本とは明らかに別系統なのではないかと思われるので、以下、大谷本の特徴を述べつつ、他の諸本についても触れてみようと思う。

まず、内容の面で大谷本が他の諸本と大きく異なるのは、次の三点である。

(1)大谷本には、諸本に共通してみられる恵心僧都が『往生要集』を製作した過程、及びそれが日本国内のみならず唐土にまで広まり尊敬礼拝される、という序にあたる部分がなく、異本によって補われている。

(2)御八講で帝より賜った御衣を母のもとへ送ったところ、母は自分の本意に違うとして泣き、御衣を恵心に送り返す場面で、大谷本にのみ他本・刊本ともにみられない母が和歌を詠むこととその和歌「後の世の法の橋とも頼しに世わたる僧と成そかなしき」がみられる。なお、この和歌は絵巻の二段目にみられる和歌とほぼ同じである。

(3)大谷本は、恵心の入滅については年月日と年齢を記すのみであり、他の諸本にみられる往生の様子は、異本によって補われている。

次に本文内部における違いをあげると、

(4)村上天皇に召され、御八講の講師を勤めた年齢が、大谷本「十五」、他本「十二」(刊本も「十三」)。

(5)恵心僧都が、母との対面の許されないことを歎く言葉。

大谷本「七歳の特別奉て今迄九年の間互対面なければ」

慶応本「七歳ノ特別レ奉テ今年七年マテ互ニ対面ナケレハ」

(刊本「七ヶ年カ間」)

(6)恵心僧都が父母の菩提を祈るため十二年の籠山行を行なう場面で、

大谷本「誦経座禅の床の上には一乘実相の霜さへて」

慶応本「観念座禅ノ床ノ上ニハ」(刊本「座禅観念」)

(7)恵心が母恋しさに耐えかねて、故郷へ向かう途中、使いの男に会い姉の手紙を受け取るのであるが、その手紙に記されている母の年齢が、大谷本「七十に余らせ給へは」、他本「八十」(刊本「八十」、法隆寺本「八旬」)。

(8)恵心の母の往生年が、大谷本「永寛二年」(九八四)、他本・刊本とも「寛和元年」(九八五)。往生した年齢についても、大谷本「七十二」、他本・刊本「七十九」。

主な相違点は以上であるが、表現の面においても、十二年の籠山行の場面の風景描写が簡略であるとか、恵心が母恋しきのあまり、比叡山から弟子を伴い奈良に向かう道行文において、他本にみられる七五調の文がほとんどみられない(大谷本「よろつ物うき心地して」↓慶応本「思立ツヨリ旅衣涙ハ露ニアラソヒテ袖ノ時雨モハレヤラス暮行秋ノ比ナレハ万物皆ヲトロヘタリ」)など、他本と比して、全体として七五調の文体による表現が少ないことがあげられる。

これらのことから、内容的には他の諸本とほぼ同じであるものの、他の諸本間に見られるような、相互の近接性を思わせる要素が、

大谷本と他本の間においては希薄であると思われる、他の諸本とはその系統を異にしているであろうと推測される。

また、大谷本が校合に用いた異本については、他の諸本と同文性が強いものの、異本のみにもみられる表現もまた細部ながら認められるため、他の諸本と同系統ではあるが、現存諸本とは別の一本のようである。

なお、(1)・(3)に関連していえば、他本にみられる序文と跋文に相当する部分がないことよって、むしろ大谷本においては、恵心と母の母恋の物語としての主題の一貫性をみせている。また、(2)については、大谷本にのみ和歌があり、絵巻にはほぼ同じ和歌がみえることから、大谷本には絵巻との交渉が考えられよう。更に、和歌を載せる点や表現的特徴からみて、大谷本には物語的要素が感じられ、おそらく説教の題材を用いて、婦女子向けの読み物として製作された物語ではなかったかと思われる。

書写年代から、刊本との関連が問題となるが、いままでみてきたように、直接的交渉はないようである。刊本については、今回直接調査対象とはしていないが、大谷本とは別系統の本文をもとにして、大幅に潤色を加えてなった本のようなのである。

次に他の諸本において、『恵心僧都物語』の成立と伝承を考えるうえで、今後の参考になると思われる点をあげておくことにする。

まず、慶応本と国会本についてであるが、一本は同文であり、きわめて近い関係にあるといつてよい。ただし、国会本には二カ所脱文がみられ、調査の結果、慶応本からの直接書写ではないこと(脱文箇所が慶応本の丁の表から裏へかけての部分であり、直接書写にお

ける目移りとは考えがたい)が判明し、おそらくは兄弟関係が想定される。慶応本には本文二一丁のうち一六丁の半ばまで読点的に朱点がほどこされており、松本隆信氏より、おそらく説教用に用いられたテキストではないかとの御教示をいただいた。国会本もおそらくそういった種類の本であろうと思われる。なお、国会本の奥書には「持主専念寺〔花押〕」とあり、寺院か、おそらくは僧侶の所蔵品であったことがうかがわれる。

高野山本については、篠原昭二氏が「巻末に『極楽願望行者遍阿敬白』とあり、最も古い形態を伝えるテキストに思える」として、「高野山に伝わったことからして、著者と見られる遍阿とは時宗に属する高野聖の一人ではなかったらうか」と述べておられる(伝承者の思想と説話の形態―源信の母の往生譚をめぐって―)『論纂説話と説話文学』(八笠間書院、昭54)所収)。今回の調査において、高野山本については、原本もしくは影印を管見することができなかったため、篠原氏の説明に従うが、高野山本もおそらく説教用のテキストであったらうと思われる。

ところで、『大日本史料』所収の高野山本には法隆寺本によって校合がなされている。法隆寺本は年代の明らかでないテキストとしては最も古く(天文十一年、一五四二)、『言継卿記』永禄九年(一五六六)五月廿四日条に「次東城坊へ罷向、恵心僧都之物語双紙一冊借用之。内侍所さい一覽之望之間如比」、同十二月十九日条に「東城坊に借用之恵心之双紙、昨日持遣返之」とみえ(市古貞次氏「中世小説年表稿」『中世小説とその周辺』(東京大学出版会、昭56)所収)、この「恵心僧都之物語双紙」は法隆寺本をさすと思われる(現

存諸本でこのような名称を有する本は他にない)、室町末期に法隆寺本が流布していたことの一端をうかがわせている。法隆寺本の最後は「比双紙御覽の御方は一返の御廻向または学文のよきたよりなりよく／＼つゝしむへし」と結びれており、布教を目的としてつくられた読み物ではないかと思われる。なお、法隆寺本には、比叡山の大廻の行者がまだ小供である恵心と出会う場面で、他本にはみられない行者と恵心の問答のことがみられる。

文体の上から大きな特徴をもつのが岡田本である。岡田本は本文五六丁で他の諸本と較べ、丁数が最も多く、大きな読み易い字で書かれている。本文は漢字混じり片仮名文で、ほとんどの漢字に振りがなが片仮名小字で付されている。ところが、この仮名表記が親鸞自筆本にみられるそれと酷似しているのである。次にその特徴を記すことにする。

(岡田本の丁数は斯道文庫のマイクロフィルムによった)

○促音「ツ」が「チ」と表記されている。

一切経<sup>キチサイキヤウ</sup>△1オ<sup>ニチホン</sup>・日本<sup>ニチホン</sup>△2オ<sup>フチカウ</sup>・仏号<sup>フチカウ</sup>△2ウ<sup>フチカウ</sup>・仏道<sup>フチカウ</sup>△3オ<sup>フチカウ</sup>・入滅<sup>ニラメチ</sup>△6ウ<sup>キチヘン</sup>・一片<sup>キチヘン</sup>△6ウ<sup>フチホフ</sup>・佛法<sup>フチホフ</sup>△10オ<sup>フチホフ</sup>(他に五例)・一天<sup>テシ</sup>△14ウ<sup>フチホフ</sup>(他に五例)・一山<sup>ヒチサム</sup>△16ウ<sup>フチホフ</sup>・末代<sup>マテダイ</sup>△17オ<sup>フチホフ</sup>(他に一例)・出家<sup>シユチケ</sup>△17オ<sup>フチホフ</sup>(他に一例)・五時八教<sup>ゴシハチケウ</sup>△17オ<sup>フチホフ</sup>・御八講<sup>ミハチカウ</sup>△17ウ<sup>フチホフ</sup>(他に二例)・結集<sup>クエチツ</sup>△18ウ<sup>フチホフ</sup>・一千人<sup>ヒチセンニン</sup>△19オ<sup>フチホフ</sup>・舍利<sup>シヤリ</sup>△19ウ<sup>フチホフ</sup>・弁舌<sup>ヘンゼツ</sup>△20オ<sup>フチホフ</sup>・月卿雲客<sup>ゲツケイウンカク</sup>△20オ<sup>フチホフ</sup>・成仏<sup>シヤウブツ</sup>△22オ<sup>フチホフ</sup>・文札<sup>モンサツ</sup>△23オ<sup>フチホフ</sup>・達<sup>タチ</sup>△23オ<sup>フチホフ</sup>・螢雪<sup>エイセツ</sup>△23オ<sup>フチホフ</sup>・一旦<sup>ヒトタン</sup>△25オ<sup>フチホフ</sup>・一心<sup>ヒチシン</sup>△28オ<sup>フチホフ</sup>・玄冬<sup>ケントウ</sup>索雪<sup>ソクセツ</sup>△29ウ<sup>フチホフ</sup>・生者<sup>シヤウシャ</sup>必滅<sup>ヒツメツ</sup>△36ウ<sup>フチホフ</sup>・絶死<sup>セツシ</sup>△43ウ<sup>フチホフ</sup>・仏陀<sup>フツダ</sup>△47ウ<sup>フチホフ</sup>・刹那<sup>セツナ</sup>△48オ<sup>フチホフ</sup>・魂去<sup>タマシヒササ</sup>テ△48ウ<sup>フチホフ</sup>・合掌<sup>カチヤウ</sup>△49ウ<sup>フチホフ</sup>

以上が全用例である。

○撥音尾の m 韻尾を「ム」と表記する。

心<sup>シン</sup>(恵心<sup>ヱシン</sup>、道心<sup>ドウシン</sup>)・三<sup>サム</sup>(三卷<sup>サムクワン</sup>、三宝<sup>サムホウ</sup>)・凡<sup>ホムフ</sup>(凡夫<sup>ホムフ</sup>)・音<sup>オン</sup>(観音<sup>クワンオン</sup>)・参<sup>サン</sup>(参詣<sup>サンケイ</sup>)・山<sup>サン</sup>(西山<sup>サイサム</sup>)・今<sup>コン</sup>(今日<sup>コンニチ</sup>)・金<sup>キン</sup>(金銀<sup>キンギン</sup>、黄金<sup>ワウコン</sup>)・梵<sup>フツ</sup>(梵音<sup>フツオン</sup>)・雲<sup>ウン</sup>(白雲<sup>ハクウン</sup>)・飯<sup>ハン</sup>(淨飯<sup>ジヤウハン</sup>)・念<sup>ネン</sup>(觀念<sup>クワンネン</sup>)・根<sup>コン</sup>(六根<sup>ロクコン</sup>)・懺<sup>ソウ</sup>(懺悔<sup>ソウケ</sup>)・品<sup>ヒン</sup>(九品<sup>クヒン</sup>)

以上、「ム」と表記される漢字すべてとその代表的な用例を( )に示したが、これらの字は例外なく「ム」と表記されている。

○「宿」の字音の振り仮名はすべて「シフ」である。

御宿所<sup>ゴシヤクショ</sup>△21オ<sup>シフ</sup>・宿善<sup>シヤクゼン</sup>△47オ<sup>シフ</sup>・宿恩<sup>シヤクオン</sup>△51オ<sup>シフ</sup>

「宿」を「シフ」と読むことは親鸞独自の用法であることがいわれている(福永静哉氏『浄土真宗伝承音の研究』風間書房、昭38)。なお、『日葡辞書』においては「宿」の読みはすべて「Xucu シュク」であり、室町末期には一般的に「シフ」とは読まなかったことを示している。

○「阿」の字音の振り仮名に「ワア」がみられる。

阿弥陀経<sup>アマミダキヤウ</sup>△13オ<sup>ワア</sup>

「阿」を「ワア」と読むのは、浄土真宗における読み癖であることがいわれている(福永静哉氏、前掲書)。

以上あげたように、岡田本には親鸞自筆本にみられる特徴が認められ、また浄土真宗固有の読み癖を忠実に残していることから、岡田本は浄土真宗教団内において、説教用に用いられたテキストではなかったかと推測されるのである。

浄土真宗の説教については、詳しくは関山和夫氏によって述べら

れているが（『説教の歴史的研究』法蔵館、昭48）、近世の仏教界における説教を代表するのは浄土真宗であったという。また源信は「浄土宗・真宗・時宗など浄土系の宗門の教学や説教には必ず現れ」、「殊に真宗では浄土真宗相承の第六祖に挙げられているため説教の上では格別重要な人師として尊敬されてきた」（関山和夫氏、前掲書四三ページ）ということである。

いままでみてきたように『恵心僧都物語』の諸本には説教のテキストを思わせる要因が認められる点、岡田本が浄土真宗内におけるテキストと認められる点、また大谷本の出所が浄土真宗の寺院である点等から、『恵心僧都物語』が製作、伝承されていく過程において、浄土真宗教団が深く関わっていたのではないかと思われる。

なお、嘗て宮崎円遵氏によって紹介された、大分県鶴崎市の専想寺に伝えられた談義僧天然の手記中に、文明三年（一四七一）の識語を持つ縦五寸、横六寸六分の『女人往生聞書』『大唐平州男女因縁』『恵心僧都事』の三部合綴の書がある。氏によれば、「巻頭の『女人往生聞書』は存覚の撰述で、明らかに真宗のもの」であり、『恵心僧都事』は源信の伝記、「殊に母公との関係を述べたもの」ということであり、天然が三書を一冊に書写した意図は、「恐らく女人往生を勧説する素材を取り纏めるためであったと思われる」、「女人往生に関する教説として『女人往生聞書』を、またその因縁説話として『大唐平州男女因縁』『恵心僧都事』の二書を取りあげたのであろう」ということである（九州真宗の源流―天然並に豊後専想寺の資料―龍谷大学論集、昭25、3）。この本については未見であるが、恵心僧都の物語が、浄土真宗と関わりを持っていたこと

の一つの証左になるであろう。また、室町時代に談義僧によって、いかなる目的のもとに取り扱われていたのかが、はっきりとうかがわれるのではなからうか。

（田中徳定記）

（付記）

中世説話・絵巻研究会の研究活動の成果として、大谷大学蔵『恵心僧都物語』の翻刻を許可して頂いた大谷大学図書館、また書誌調査において御教示下さった同図書館の横田恵先生と林一宗先生にお礼を申し上げます。また、本調査に関して、さまざまに便宜をはかっていただき、あわせて御教示いただいた斯道文庫松本隆信先生・大谷大学石橋義秀先生に御礼申し上げます。この翻刻・研究に当っては、水原一先生より適切な御指導を賜りました。また、岡田本については本学の木村晟先生より御教示をいただきました。

中世説話・絵巻研究会

園部幹生 藤井 確彦 鈴木禎子  
吉田塩美 石田真理子 佐野桃子  
戸張祐美 野々山篤彦 吉田敏江  
顧問 水原 一 田中 徳定